〈書 評〉

李志毓著『驚弦——汪精衛的政治生涯』

王　　晟　旭

要旨：汪精衛は中国近代史上の極めて論争的な人物として、彼の身には多くの論争が巻き起こっており、これまで中華人民共和国、中華民国をはじめとする中華文化圏で汪精衛に対する評価も基本的に民族主義と善悪二元論を主な出発点としてきた。本稿は主に一人の中国学者が民族主義の束縛から抜け出し、比較的公正で客観的な態度で汪精衛に対して研究を行った著作を紹介し、将来の汪精衛研究者に新しい視野と構想を提供することを望んでいる。

キーワード：汪精衛、中華民国、中国近代史、民族主義、日中戦争

はじめに

李志毓氏（以下、著者と略す）の本著は、台湾大学、国史館などが所蔵する関連史料、一次史料（たとえば、「汪兆銘史料」、「国民政府档案」など）を主要文献とし、併せて歴史学界で一定程度の評価を得ている著述を二次史料としてまとめられた汪精衛が政治の生涯に関する論著である。本書は序説・本論・余論・参考文献および後記という五部から構成される。具体的構成は以下の通りである。

序説
第一章　死生：「烈士」成名
第二章　進退：教育與政治
第三章　沈浮：聯共・反共
第四章　戰和：面對日本
第五章　去留：汪蔣分岐
第六章　成敗：「和運」的淪落
餘論：軍事化時代的文人
參考文獻
後記

著者は一九七九年生まれ、北京出身、中華民国政治史を専門とする。華東師範大学の学部学生時代より、香港中文大学・台湾大学などの訪問研究を経て現在の中国社会科学院の研究員に到るまで歴史学者として多数の学術論文を発表してきた。この数十年間ずっと一貫して汪精衛研究に力を注いできた。本著は著者の論文「汪精衛的性格与政治命運」[1]を修訂して出版したものである。

1939年末、汪精衛はベトナムで「艶電」を出して自分の対日主張を提出してから、1945年日本降伏にかけて、日中戦争の局勢に鑑みて汪などの「対日協力」行為についてまだ議論の余地があると言ってよいであろう。だが、1945年南京で行った「漢奸裁判」で汪の妻と息子及び汪政権の主要人物が「漢奸罪」と断罪された以降、中国国民党の「民国史観」であろうと、中国共産党の「革命史観」であろうと、両方とも自分の政権の正統性を強調するために、常に汪及びその集団を「漢奸」、「売国」など反動的立場に置かせて批判している。

結果的に見ると、今日に至って、中華圏における汪兆銘が「漢奸」であ

1　『歴史研究』2011年1期、105–122頁。

るという印象はほぼ定着だった。一方で汪は「漢奸」のレッテルに貼られた理由が基本的にナショナリズムの視野あるいは政治的目的であり、そして政治の宣伝や民間の創作を加えると、汪はさらに一歩に妖魔化された。妖魔化とは具体的に言うと、汪は自分の権力欲に流され、自分の栄華のために日中戦争の時にまず日本に妥協して売国条約に締結して（例えば塘沽協定など）、その後さらに中国を裏切って日本政府の走狗に転落していたということ。従って、汪の罪は許せない、彼の人物像はもっと言うに値しないのである。

特に今のナショナリズムがはびこっている中国では、中国の学者は汪氏らの研究に対してさらに距離を置いている。このような環境と雰囲気の下で、本書の出版はもっと特別な意味を持っていると思われる。

また、本著からの引用箇所は直後にページ数を表記した。

一

本著の構成に沿って章ごとにその内容を見ていこう。

「序説」では、冒頭に1941年に南京国民政府主席に就任した汪氏が東京でかつての革命戦友宮崎寅蔵の未亡人と会見した際に書いた詩を引用し、本著に通底する悲壮な雰囲気を提示する。そして、汪精衛が摂政王を暗殺する前に撮影した古い写真を取り上げて、汪精衛の三十六年の政治生涯を総括する。簡単な総括の後、汪精衛の「烈士」から「漢奸」までという短くも劇的な一生を「雙照樓頭老去身、一生分作兩回人」（三頁）という漢詩で象徴的に示す。そして、著者が詩によって「序説」を始め、また詩によって結んでいることが示しているように、「序説」は首尾一貫して高度な芸術的創作手法で貫かれている。また、註記で従来の汪精衛の政治生涯に関する研究文献や作品を詳細に列挙している。

第一章では、清朝末期に於ける反清志士による刺殺活動と、汪精衛の幼少期の家庭環境と家庭教育を紹介し、それらと汪精衛の摂政王暗殺との関

係を考察している。著者によると、清朝は「暗殺時代」であり、革命党員は国家の未来のためには高官の禄を放棄するだけでなく、粉骨砕身すべきと認識していた時代とされる。汪精衛は没落した官吏の家に生まれ、幼少より陶淵明、陸放翁、王陽明の著作をよく読んでいたとされ、没落した家庭環境で陽明心学に影響されたことで、汪精衛の心には幼少より自然と「烈徳」、「貞徳」の二つの思いが生じ、同時に荊軻のように悲壮でありながら恐れることを知らず、国のために献身して後代の人に称賛されたいという願望が生じた。「暗殺時代」の出現が汪精衛に烈士の夢を成就させる絶好の機会となったのである。しかし、摂政王暗殺未遂事件はわずか二十七歳の汪精衛に過分な栄誉と地位をもたらすことになり、このことが汪精衛の政治認識に深く影響しただけではなく、汪精衛の運命にも莫大な影響を与えたとの見解が示されている。

第二章では、著者は汪精衛の書簡を十分に活用し、辛亥革命後の汪精衛のフランスでの隠居生活を詳細に検討している。フランスにいた汪精衛は、清は既に壊滅したが、新しく建てられた中華民国は依然として混乱していたため、教育を通じて中国を根本から救うことを望んでいたと指摘する。著者は本章では主として、汪精衛フランス滞在当時の無政府主義思想と、蔡元培らと展開した教育活動と雑誌の創刊を考察している。更には、汪精衛はフランス滞在の寂しさから、教育と帰国参政の間で揺れ動いていたとその心理を分析し、汪精衛は政界に自身の影響を残すことを望み、最終的には辛亥革命時期に抱いた独りよがりの英雄主義を胸に、久しぶりに中国に帰国し政界に復帰したのだろうと推測している。

第三章では、帰国後の汪精衛と中国共産党との繋がりを述べる。即ち、汪精衛は何故蒋介石との決裂ないし国民党の分裂をいとわず、陳独秀をはじめとする共産党と協力し、そして最後に共産党と決別することになったのかの過程を述べる。その上で著者は、汪精衛がなぜ国民党を分裂させてでも、ソビエト連邦と中国共産党と協力しなければならなかったのかという心理的原因を詳しく説明し、また汪精衛が共産党と協力した後に、どの

ような問題と局面に直面していったのかを述べている。汪精衛がこの段階で失敗した原因として、主としてその理想主義を指摘し、かつ自身の軍隊を所有せず、後期にはソビエト連邦の支持を失った点を指摘する。これらの原因によって、汪精衛は最後に進退窮まる窮地に陥り、最後に再びフランスに脱出しなければならなかったと結論づけている。

第四章では、まず「烈士」または「漢奸」というような極端かつ単純な分類で汪精衛およびその支持者のこの間の行為を総括することは不適切であるとし、また、汪精衛の悲劇的生涯は汪精衛本人に起因するものではなく、当時の日本軍閥と官僚政府に責任があったとの見解を示す。また、著者は階級属性、汪の個人性格、家庭背景から汪精衛の行為を理解している。たとえば、「封建社会における没落士大夫階級」が汪精衛たちの階級特性であり、彼らの多くは中国儒教という文化的観点から中国を俯瞰し、「政権」や「実体国家」等の概念では中国を定義できないと認識していた。例えば、元朝や清朝のように、支配者層が漢人でなかったとしても、最終的にはこれら統治者も必ず漢文化に同化した。そのため、汪精衛たちは、中国が日本に占領されたとしても、将来的には日本人も中華文化に同化するはずである、したがって死ぬよりも、先ずは実力を温存して将来のために準備をすることが賢明であると考えていた。盧溝橋事件の後、日本は中国の軍事力と装備に対する圧倒的優位を維持しつつ、急速に華北、上海及び当時の国民政府の首都「南京」を次々と攻略した。国民政府の政治的失敗と国軍の敗戦は、全国人民のみならず、政府内の多くの高級官僚までもが対日本戦争に対する自信を喪失した。その一方で、国民政府の多くの者が依然として戦争で莫大な利益を得ていた。このような状況を目にした汪精衛には自然と日本と交渉する考えが生まれたのだと著者は述べている。

第五章では、主に汪精衛が国民党を離れる前の彼の思想の変化と、蒋介石と日本に対する態度の相違、当時の国内外の情勢の変化と展開を述べている。当時、蒋介石は日中戦争によって国内の矛盾の矛先を逸らし、国民政府の地位向上を望んでいたが、汪精衛は国家統治者として大局から人民

を考えるべきであり、公事をもって私情を図ることはできないと考えていた。そのため汪精衛と蔣介石の間には戦争と平和に対する認識の根本的相違が生じた。その後、蔣介石の「焦土抗戦」政策により、汪精衛の故郷広州は焦土となった。このことが汪精衛を深く悲しめたのは間違いなく、また国際的にも、1938年10月に英米などの宥和政策によって、英米あるいはソ連などが中日戦争の調停に乗り出すという汪精衛の主張も当てが外れてしまった。最後に、汪精衛は自己に対する過信と日本に対する幻想によって、後戻りできない道を進むことになったとの認識を示している。たとえば、汪精衛は「自分の平和的主張は誰もが心に持っている考えだと思っているが、誰もが口に出す勇気がない」（此意乃人人意中所有，而人人口中所不敢言）（220頁）、そのため、幼い頃から王陽明の「知行合一」の影響を受けている汪精衛は、もし自分が最初にみんなの心の中で言いたいことでも言えなかったことを言った後、自然に自分の主張がみんなに呼応されると思っていた。しかしながら、軍の面で北伐戦争の時から汪精衛と緊密に関係していた張発奎氏も、すでに支持を約束していた雲南省の軍閥龍雲氏も、また、汪精衛派とされていた顧孟余氏らも、汪精衛が日本との和平交渉を主張した後も、いずれも沈黙を守った。そして、軍の支持もなく、国内世論の助けもない中に汪精衛は依然として無邪気に「私が望んでいることは、日本の政策が約束通りに中国で広く宣伝できることだけだ」（我所期盼的只有一件事，就是日本的政策能按與我們約定那樣，在中國廣泛宣傳）（248頁）と言った。ここには汪精衛が言及した約束はすなわち1938年11月20日に上海の重光堂会談で調印された「日華協議記録」であり、この協議で日本側は「在華租界の返還」、「戦費の賠償を要求せず」、「２年以内に完全に撤兵」[2]を示している。

第六章では、汪精衛が重慶を離れてから最後に名古屋に客死するまでの間の活動について述べている。汪精衛は重慶を離れた後、国民党から除籍

2　国立公文書館アジア歴史資料センター「渡辺工作の現況」（其２日華協議記録）、Ref.C11110699400、防衛省防衛研究所、昭和13年11月。

され、犯罪者として、暗殺されかかり、さらに日本政府の破約と高宗武・陶希聖両氏の裏切りに遭った。しかし、この一連の事件を経験した後も、汪精衛は依然として日本と協力して和平運動の道を歩むことを止めなかった。汪精衛の一途な性格と自負心に支えられた使命感が、汪精衛の政治的主張を生み、同時にその一生にも影響を与えたのだという著者の視点が見て取れるように思われる。

「餘論」では、著者は汪精衛の生涯に悲劇をもたらした原因について検討している。著者は汪精衛が明らかに文人的気質を備えた人物であるとする。つまり、汪精衛の性格はあまりにも偏屈で、過敏で、衝動的があるとする、これらの気質のおかげで若き汪精衛は「英雄」の名声を得させたが、同時に晩年の汪精衛を永遠に抜け出すことの出来ない深淵に引きずり込むことになったと結論づけている。

「参考文献」が示しているように、著者は中華人民共和国、中華民国、日本、ソ連および英米などの資料を十分に駆使している。この点だけでも、本著の充実性と全面性を知ることが出来よう。

「後記」では、主に著者の歴史に対する愛情と探究心について述べ、自身の将来を語り、最後に良師、善友、家族に対する謝辞を述べている。

二

本著は、書名が示すように、汪精衛の政治生涯を叙述した著作である。本著を通読すると、文章は簡潔であり、構想は斬新で汪の文章及び他人との手紙を主な切り口とし、そして当時の歴史環境を結合して汪の心理活動と個人の性格特徴に対して分析を行った。筆致には常に情感が溢れ、その視座が独特であり、つまり中国の学者が一貫してナショナリズムの視点で汪を評価してきたという束縛から飛び出し、相対的に客観的で公平な態度で汪の行為を考察し、評価したことが分かる。また、一般的に政治に関する書は、非常に厳粛ではあるが味気ない印象を読者に与えるものだが、著

者は歴史作家特有の繊細さを十分に発揮し、弁舌爽やかに語ることで、読者をいつの間にか汪精衛の物寂しい一生に取り込んでしまう。

歴史研究にとってまず重要なのは歴史資料の選択であり、そして、同一事件に対しても異なる角度から解読すれば誤読となる場合もあるだろう。そのため歴史研究においては、どのような歴史資料を選ぶかが我々の研究方法と結果に決定的な影響力を持っていると考えている。本著の著者は歴史資料の選択において、歴史研究者としての優れた資質を有していると言える。まず著者は汪精衛が活動した時代に出版された新聞と公文書を主とし、そして胡漢民、郭沫若、周仏海の回顧録などの史料を補足とし、その上で、汪精衛側の視座から汪精衛を見ようとする。また同時にも、汪精衛の政敵（たとえば蔣介石など）と共産党の立場から汪精衛のことを検討して汪精衛を全面的に解読することが保証されるとした。また、参考文献の選択にも時間的幅をもたせるべく細心の注意を払い、汪精衛と同じ時代の歴史資料（例えば、革命旧人『汪精衛的全貌』華夏出版社、一九三九年版）を参照しつつ、同時にも楊天石（『蔣氏密檔與蔣介石真相』重慶出版社、二〇〇二年版）のような現代の民国史専門家の作品も参照している。数十年に亘る参考文献を用いたことで、ここ数十年の歴史学界の汪精衛に対する認識や評価の推移を読者は明確に知ることができる。つまり、最初の一方から、ナショナリズムと善悪二元論の角度から汪を認識し評価しようとしたが、今では一部の学者がこの臼を突破しようとしている。例えば、本書の著者は人物の性格と心理の分析という角度から汪を解読しようとした。最後に、本著の白眉は間違いなく著者が台湾の史料を大量に使用している点であり、他の汪精衛研究者にも新しい方向性と資料上の便宜を提供していると言える。そして、中国社会科学院所蔵する『蔣介石日記』（手書き件）は重要である。蔣介石が中華民国史において重要な地位を占めることは言うまでもなく、だから蔣介石の選択は中国の方向を変えたとも言える。従って『蔣介石日記』を通じて、当時生じた出来事を直接的に知ることが可能となる。しかし、残念ながら『蔣介石日記』は蔣方智怡氏

によって米国フーバー研究所に委託保管されており、現在はコピーは禁止され、書写のみが許可されているという状況である。これは中華民国史研究者にとり極めて残念なことと言わざるを得ない。そして、また、中国国民党の党史館にも多数の貴重な歴史資料があるが、しかし完全なデジタル化はされておらず、閲覧には台北への訪問が必要である。もしこれらの資料がデジタル化されれば、歴史研究者にとって大きな助けとなるのは間違いない。

以上のように本著が汪精衛研究著として極めて優れたものであることは間違いないが、以下、評者が感じた疑問点と見解を述べてみたいと思う。

まず本著全体の構成の点である。本著は『汪精衛的政治生涯』と題されているが、第一章は「暗殺時代」（六頁）から始まり、汪精衛が摂政王を暗殺した時代背景を直ちに述べ、暗殺前の汪精衛の政治思想や政治活動などについてはほとんど言及していない。そのため汪精衛のことを知らない読者には唐突な印象を与えるのではないかと思われる。汪精衛が政治活動に足を踏み入れたより早い時期から記述を始め（例えば、一九〇一年に十四歳当時の汪精衛が朱執信らの同志たちと群智社を結成したことなど）、汪精衛の政治生涯をもっと全面的に記述すべきだったのではないだろうか。

二つ目は、第三章「沈浮：聯共・反共」の箇所で、著者は汪精衛とソビエト・中国共産党との愛憎葛藤劇を述べている点である。特に第三節「走向反共」（94頁–110頁）では汪精衛と中国共産党がいかに決裂したかを述べ、本節に相当する時期が汪精衛前期政治生涯の重要な転換点と言える。しかしながら、著者は汪精衛のこの時期の思想動向を直接的には述べておらず、ただ、農会運動の展開と中国共産党の活動などの側面から汪精衛と武漢国民政府が直面していた苦境を述べるに留まっている。一方、第六章「成敗：『和運』的淪落」（205頁–275頁）では、汪精衛が重慶から脱出した後、名古屋で亡くなるまでの間の和平運動の過程について述べている。本章では、著者は主に重慶国民政府と日本人の和平運動に対する態度、及

び汪精衛が和平運動を選択した動機と汪精衛の性格を分析しているが、汪精衛が南京で国民政府を設立した後、和平運動として何をしたのかを具体的に説明していない。

三つ目は文学作品の扱い方である。第一章で李叔同の「満江紅」（6頁）を引用し、第六章の終わりに汪精衛の「百字令・春暮郊行」を引用している。もちろん、この二首以外の詩を引用する例も見られているが、引用された詩の数はまた拡充できると思われる。汪精衛は中国の古体詩詞を創作のが上手な文人でもある。かつ、自分の詩集『雙照樓詩詞藁』がある。全本には327首の詩詞が収録されており、15歳の重陽節（1897年）から亡くなる前年の重陽節（1944年）まで、汪の一生光陰をほぼカバーしていると言える。1944年に汪は名古屋大学病院の病床で見舞いに来た人に「生平的思想旨趣，都跟隨着勢時勢的變遷，陸續發表為文字和言論，大家都可以看得到。而真正能代表我内心的就是雙照樓詩詞」[3]（日本語訳：（私）生涯の思想の趣旨は時勢の変遷に伴って、次々と文字や言論として発表され、誰でも見る事ができる。でも、しかし私の心を代表できるのは雙照樓詩詞である）とある。なので、もし汪精衛がそれぞれ歴史時点に書いた詩を参考しならば、本著の内容はより充実し、繊細さを増すことができたのではないかと思われる。

四つ目は、この本の最後には汪精衛の個人性格が彼の政治思想に対する影響をまとめたが、もし本の中で汪精衛の家庭は汪の性格、思想にどのような影響を与えたのかについてもっと詳しく検討すれば、内容の構成にさらに完全になるのではないだろうか。

五つ目は、本著の第一・二章では、著者は汪精衛の政治思想いわゆる無政府主義の信仰があることを特に強調し、無政府主義に基づいてこの間の汪精衛の多くの判断を分析している。しかし第三章以降では著者は汪精衛の政治思想の傾向には関心を示さず、つまり、汪精衛は無政府主義を捨て

3　汪精衛『汪精衛詩詞新編：雙照樓詩詞藁：讀後記・手稿・集外首刊』、時報文化出版企業、2019年、XXII。

た以降、どんな政治信仰に信じていたのかについて基本的に言及していない、逆に汪精衛と中国共産党の関係や小資産階級と士大夫というような階級的立場から汪精衛を分析している。著者が本著の中で採用した歴史問題を分析する方法論が変化しているのであり、読者は違和感を覚えるざるを得ないであろう。本著全体を一つの方法論で分析すべきだったのではないだろうか。以上、本著の内容について卑見を述べた。

次に、本著のいくつかの具体的な箇所の見解に対して、卑見を述べてみたい。

まず著者は第二章において、

> 彼(汪精衛)の無政府主義への信仰は、彼に暗殺を至上のものと考えさせた(後略)(他的無政府主義信仰、使他崇尚暗殺(後略))(31頁)

と述べているが、しかしこれはまた検討の余地があるのではないだろうか。

一九〇五年に汪精衛は黄興、陳天華らと東京で同盟会成立の準備に参加し、党規約を起草した。その後の会議で同盟会を設立し、「異民族を排除し、中華を取り戻し、民国を創立し、土地の所有権を平等とする(驅除韃虜、恢復中華、創立民國、平均地權)」という党規約を作成した。この中の「創立民國」という句は、まさに中国で中華民国という政府を創立しようという意味だったのではないだろうか。

また、汪精衛は一九一〇年二月に北京で摂政王暗殺未遂で逮捕された。彼は同年一月十一日に孫中山に宛てた書簡で、

> 汪精衛(私)は団体を維持しようとしている(弟意欲維持團體)。
> 章太炎たちは東京で私たちを中傷し、攻撃し、悪事を尽くした(太炎輩在東京、所以排擊破壞、無所不至矣)。
> もし今後、私達が天下に著れる行動を取る事ができたならば、章太炎らはきっと恥じいるだろう(然則今後吾輩復有事實之進行、著於天下、則彼等愧怍之不暇)[4]

4　汪精衛『汪精衛政治論述新編』、時報文化出版企業、2019年、32頁。

と述べている。なぜ汪精衛がこのように述べているのかと言えば、一九〇九年冬に同盟会の章太炎や陶成章らは「偽〈民報〉檢舉狀」を発表し、

孫文は同志の推挙を力に、時流に乗じて私利をむさぼり、あらゆる手を尽くして財貨を集めた（籍同志擁戴之號、乘時自利、聚斂萬端）[5]

と孫文を非難していたからである。そして、汪精衛は逮捕後の供述の中で、

それに、北京のような重要なところで人々の心を奮い立たせるのだ（繼思於京師根本之地、為振奮天下人心之舉）[6]

わが党に言わせれば、満族と漢族との間の隔たりをなくすことができるのかどうか、いわゆる人民に権力を付与することができるのかどうかということはしばらく置くとしても、立憲君主制について言えば、それが救国の目的を達成できないことは断言できる（以吾黨人論之、姑勿論所謂平滿漢之界、與所謂予民以權者為果有其實否、即以君主立憲之制而言、其不能達濟國之目的、可決言也）[7]と述べている。

以上の点から、汪精衛が摂政王を暗殺した目的は、第一に、孫文が革命の名を借りて財を集めたという当時の章太炎の告発を粉砕するためであり、第二に、自己犠牲によって当時の革命党の低迷していた士気を奮い立たせようとしたためであり、第三に、当時の清朝の予備立憲公会つまり立憲君主制に反対するためであった。

確かに、当時は無政府主義が盛んで、汪精衛が執筆した民報にも無政府主義を宣伝する文章も多く、あわせて当時は多くの革命者（たとえば吳樾、徐錫麟）も清朝の官員を暗殺する方法を取っているが、しかし暗殺はこれらの革命者にとっては手段としか言えず、あるいは無政府主義者の影響を受けていたと言っても過言ではない。だが、暗殺の手段を取って摂政王を暗殺しただけで、この時の汪精衛が無政府主義を信仰することはやはりこじつけだと断定なのではないだろうか。

5　朱維錚、姜義華編著『章太炎選集』、上海人民出版社、1981年、493頁。
6　前掲書『汪精衛政治論述新編』、54頁。
7　前掲書『汪精衛政治論述新編』、55頁。

従って、著者の汪精衛が摂政王を暗殺した動機が無政府主義を信仰したことによるという見解は再考の余地があると思われる。

まず、第二章では蔣永敬『胡漢民先生年譜』の中の「汪精衛は満票で当選し、『自分で自分を選んだ』という笑い種を残した(汪精衛以全票當選、留下了「自己選自己」的笑談)」という文を引用している(57頁)。蔣永敬著に当たって確認したところ、『胡漢民先生年譜』にはこの部分の文が鄒魯の『回顧録』を引用したものであることが分かった[8]。しかし、汪精衛本人の自伝草稿は、次のように述べっている。

> 次にこれらの委員の中から国民政府の主席一人と常務委員五人を選出し、当時は私と胡漢民が他者を選んだ以外は、残りは皆私を主席に選出した。(中略)その後、一般軍事委員の中から一般軍事委員会で主席を一人選ぶことになり、当時は私が他者を選んだ以外は、残りは満場一致で私を主席に選んだ。(再由此各委員中公舉國民政府主席一人及常務委員五人、當時除我之選舉票及胡之票舉他人外、餘均舉我為主席(中略)。隨後一般軍事委員中、在軍事委員會選舉一主席、其時除我一票舉他人外、全場一致舉萬為主席。)[9]

両者を比較すると、明らかに食い違いがある。何れが事実なのであろうか。実は鄒魯『回顧録』は汪精衛が「自分で自分を選んだ」ことを述べた後に続けて次のように述べている。

> その夜、伍氏(伍朝枢)が詳細を私に教えてくれた。私は汪精衛をもともととても尊敬していた。何故ならば彼は一貫して官職にも議員にもならないと主張し、清廉高潔を自任していたからだ。しかし、今回の選挙から見ると、彼は利禄に執着する人物であることが分かった(當晚伍先生把詳情告訴我、我對於汪本來相當敬重、因為他一貫地主張不做官、不做議員、自命清高、但由此次選舉看來、他是個熱心利祿

8 蔣永敬『民國胡展堂先生漢民年譜』、台湾商務印書館、中華民国70年1月初版、335頁。
9 汪精衛『汪精衛生平與理念』、時報文化、2019年、277頁。

的人)。[10]

つまり、主席の選挙を行った際には鄒魯は現場に居合わせず、事後に伍朝枢の話を聞いたことが分かる。鄒魯と伍朝枢はどのような人物であったのか。伍朝枢は孫中山の三大政策に一貫して反対した人物である。鄒魯は汪精衛が主席に当選した同年末に北京で開かれたいわゆる西山会議における西山会議派の代表者の一人であり、西山会議で鄒魯らは汪精衛と共産党との合作に明らかに反対していた。また、汪精衛の記録に拠れば、選挙の際には胡漢民も居合わせていたことが分かる。しかし、なぜ蔣永敬は『胡漢民先生年譜』を編纂する際に、当事者である胡漢民の話を引用せずに、鄒魯と伍朝枢の伝聞を引用したのだろうか。第二に胡漢民がこの史実に関する直接的発言を残さなかったのではないかと推測される。たまたま鄒魯らが汪精衛を貶めるために「自分が自分を選ぶ」という虚偽をでっち上げていたため、蔣永敬氏に引用されたと考えられる。

そして、著者は、第六章（238頁–239頁）で陳果夫と白崇禧の報告を引用し、汪精衛らはハノイと上海での活動経費は百万元を超え、併せて、香港での反戦活動と、蔣介石打倒のために日本側から三百万元を受け取ったと述べている。しかし、汪精衛政権の朱子家（金雄白）は著書『汪政権的開場與收場』で、汪精衛たちの「香港での活動費は僅かに五万元であり、しかも周作民、杜月笙らはその友情から自ら助成した、上海での経費が正金銀行の関税残高だ。これは中国の関税収入で、日中戦争後に日本に凍結され、現在は交渉解凍を経て活動費に充てられている」[11]と述べている。従って、この点については更に再検討の必要があるであろう。

三

中国か台湾かを問わず、また中国共産党か国民党かを問わず、更には統

10　鄒魯『回顧録』、岳麓書社、2000年9月、140頁。

11　朱子家『汪政権的開場與收場・第一巻』、風雲時代、2014年、38–39頁。

治者か被統治者かを問わず、汪精衛は常に正真正銘の売国奴と見做されてきた。特にナショナリズムが高まっている今日の中国では、「漢奸」を擁護する者がいれば、間違いなく厳しい非難と批判を受けるであろう。そのことを鑑みれば、中国在住の著者が一学者として、「政治的な正しさ」という束縛から解放されて、相対的・客観的視座から汪精衛を評価しようとした姿勢は高く評価すべきであろう。

汪精衛の一生は彼の筆名「精衛」が示すように悲壮なものであった。「精衛」とは、そもそも中国の地理書「山海経」での登場人物であり、そもそも女娃という炎帝の末女だが、東海で遊歴の時に海に溺死し、その恨みを鳥と化し、仇を討つために東海を埋め尽くすことを志、毎日疲れを知らずに周囲の山から枝や石を銜え運んで東海に投げつけ、その鳥の鳴き声が「セイエイ」というので「精衛」と名付けられた。後人はこの故事を悲壮な状況へ陥落した後も強靱にして不屈の意思を示すものと肯定的に解する[12]。この故事の内包意味を踏まえて上で見ると、汪精衛は『民報』で「精衛」を自己主要な筆名[13]としたのは興味深いのではないか。彼はまさにこの詩の描写のように、達成不可能であることを知りながらも、そのために行動したのだ。

1943年11月、汪精衛は大東亜会議の参加のため、日本に赴き、諸葛亮「後出師表」の拓本を携えて当時の日本首相だった東条英機に贈った[14]。ここでは、評者が注目しているのは「後出師表」の最後の一言である。すなわち、「臣鞠躬盡力、死而後已、至於成敗利鈍、非臣之明所能逆睹也」(日本語訳:臣鞠躬尽力し、死して後やまん。成敗利鈍に至りては、臣が明の能く逆め見る所に非ざるなり)[15]ということである。これはおそらく汪精

12　袁珂著・鈴木博訳『中国の神話伝説』(上)、青土社、1993年、183頁。

13　評者の統計によると、民報時期に汪は「精衛」という筆名で文章を発表したほか、それぞれ「守約」、「伯夔」、「撲満」という筆名でそれぞれ文章を1編発表したことがある。

14　熊本史雄、石井仁「汪兆銘から東條英機に贈られた出師表の拓本」、駒沢史学(91巻)、2018年12月、141–172頁。

15　前掲文「汪兆銘から東條英機に贈られた出師表の拓本」、160–163頁。

衛の晩年の心によくあった心のモノローグなのではないだろうか？　晩年の汪は自分の判断に基づいて、自分の一生の名誉や政治的前途を賭け、自己の影響力を借り、戦争の泥沼に陥った中国の実力を保存できる道に連れて行きたいと思っていたが、いかんせん現実も残酷で、日本はまず汪との当初の約束を破棄し、その後、米国と開戦して戦場で次々と敗退した。

実は汪精衛自分も不吉な予言が当たった。すなわち、1910年、摂政王の暗殺事件で投獄された際に創作の詩「留得心魂在、残躯付劫灰」[16]（日本語訳：自分の真心と魂を残し、壊れた体を灰にする）と書いたように、1946年に汪精衛の遺骸は南京梅花山の墓地から何応欽の軍隊に引きずり出されて焼却された。ちなみに、今の日本における汪の記念物として、名古屋大学の「汪兆銘の梅」と「東京宗泰寺に、汪兆銘の墓がある、遺骨ではなく遺品がおさめられているらしい」[17]という 2 カ所が知られている。

汪精衛の死後、今年で既に七十九年が経った。七十九年は一人の人間にとっては長い時間だが、歴史にとってはただ一瞬である。だからこそ、評者は歴史が未来のいつか必ず汪精衛に公正な評価を与えると信じて擱筆する。（オックスフォード大学出版、二〇一四年。297頁）

謝辞

本文は悲運の汪精衛氏の霊に捧げる。

中華民国109年春　初稿
中華民国112年春　加筆

16　前掲書『汪精衛詩詞新編：雙照樓詩詞藁：讀後記・手稿・集外首刊』、8 頁。
17　半藤一利『半藤一利の昭和史』、文芸春秋、2021年、141頁。